

I14
J3-23

世界動物文学全集

23

ロー
ジエ
ライ

908.3

I14
J3-23



110620

日文 701708908

界動物文学全集

23



講談社

世界動物文学全集23 ジェニイ
ローラ

昭和55年 9月18日 第1刷

著者 ポール・ギャリコ
 ロイナ・ファー

訳者 古沢安二郎
 藤原英司

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 郵便番号112

電話東京 (03) 945-1111 (大代表) 振替東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 1780円



© 古沢安二郎 藤原英司 1980年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-405234-2253 (0) (文2)

目次

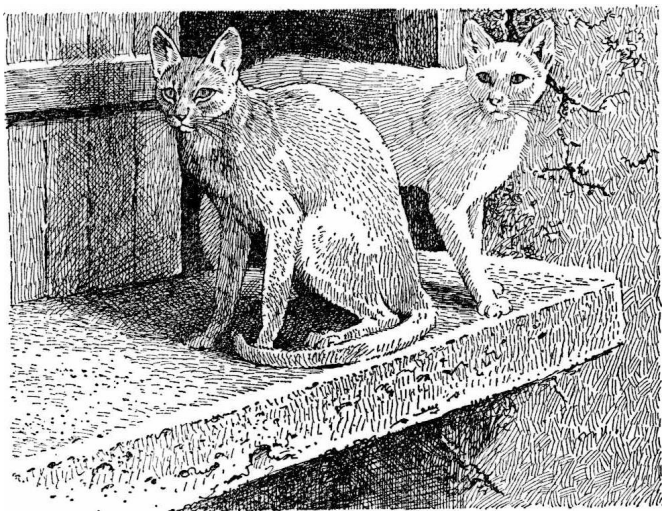
ジェニイ 5

ローラ 241

解説・藤原英司 384

装幀 蟹江征治

イラスト 田中豊美



ジ

エ

ニ

イ

ポール・ギャリコ
古沢安二郎訳

JENNIE

by

Paul Gallico

Copyright © 1945 by Paul Gallico

Japanese language anthology rights arranged

with Hugjes Massie Ltd., London

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

猫ちゃん、猫ちゃん、ボウドロonzちゃん

猫ちゃん、猫ちゃん、ボウドロonzちゃん

おまえどこへ行ってたの？

あたい女王さまおがむため、

ロンドンの街へ行ってたの

猫ちゃん、猫ちゃん、ボウドロonzちゃん

おまえそこでなに獲ったの

あたいは階段駆けのぼる、

太っちょネズミを獲ったのよ

猫ちゃん、猫ちゃん、ボウドロonzちゃん

おまえそれをどうしたの？

あたいごはんに食べるため、

あたいのえさ袋にしまったわ

——スコットランドの古い童謡——

1 発 端

ピーターはどうも自分は事故にあつて、ひどい怪我をしたのにちがいないと思つた。スコットランド生れのばあやのそばにいたら、大丈夫だったのだけれど、広場の公園の柵のそばで、かわいらしい子猫が初春の日射しを浴びながら身づくろいしていたので、道路を渡つてその公園まで駆けて行こうと、ばあやのそばからバツと飛び出してしまつてからのことは、あまりよく覚えていない。

その子猫を抱いて撫でてやりたいと思つたわけなのだが、ばあやが金切り声をあげたとたんに、何かがすごい勢いでどすんとぶつかり、そのあとは、陽が落ちてあたりが真っ暗になり、昼が夜に變つてしまつたような気がした。体はどこかがずきずき痛むようである。いつかフットボールを追いかけて砂利山のそばまで駆け出し、そこころんで、むこうずねの皮をすっかりすりむいたときとおなじ痛さである。

ぼくは今ベッドにはいつているようである。ばあやがそばにいて、妙なぞき方でぼくをのぞいている。つまり、はじめのうち、ばあやはぼくのすぐそばにいた。そばもそばも、いつもは皺のよったピンク色の顔色をしていたのに、そうではなくて、何という真っ青な顔をしているのだろうと、はっきり見えるくらいそばにいた。かと思つてこ

んどはその顔が望遠鏡を逆にのぞいているように、遠くにかすんでいて、とても小さく見えるといった具合である。父も母も来ていない。そんなことにピーターは驚きはしなかった。父は陸軍の大佐である。母はいつもせわしなくおしやれしながら、ぼくをばあやにまかせっぱなしにして、外出しないではいられないたちだからである。

ピーターはこれほどばあやが好きでなかったら、ばあやに腹を立てていたかもしれない。なぜかといえば、ぼくはもう八歳になっているのだから、そのぼくをまるで赤ん坊のように扱うばあやなんか、いらぬはずだということがわかってからである。それをまるで、自分の身のまわりの始末さえできない小さな子供のようにな、いつまでたっても手をひいて歩きまわったがっているんだから、困ったものである。しかし今はもう母が忙しがつて、ぼくの面倒をみてくれないのには慣れっこになってしまった。いつも家にいて、夜になるとぼくが寝つくまで、そばについていてくれないことにも慣れっこになってしまった。母はばあやが自分の代りをしてくれることに、ますます頼りきってしまい、いつかも父が——ブラウン大佐というのだが——もうそろそろばあやにひまをやっていいころじゃないか、と言い出してみたのだが、母はばあやを帰らせることなど考えても耐えられないと言ったので、もちろんばあやはそのまま家に居ついてしまったわけである。

もしぼくが今ベッドについているのだとしたら、たぶん

ぼくは病気のだろう。もしぼくが病気ののだとしたら、たぶん母も帰って来てそのことを知ったら、いつもよりはよけいにぼくのそばにいてくれるにちがいない。そしてひよっとしたら、ずっと前からのぼくの願いをかなえて、ぼくだけの猫を部屋の中に飼うことを許してくれるかもしれない。その猫はぼくのベッドの足もとで体を丸めて眠り、寒い夜だったら、たぶんふとんの中にもぐりこんで来て、ぼくの腕の中に寄りそって来ることだろう。

ピーターはものごとがついてからずっと猫を飼いたいと思っていた。最初の記憶は今からずいぶん前のことであるが、四歳になったころ、ジェラーズ・クロス近くのある農園に連れて行かれて泊ったことがあった。そのとき台所に案内され、白とダイダイ色のうぶ毛の玉のような、子猫のいっぴいはいった籠を見せられたのである。ショウガ色の母親猫はいかにも誇らしげに相好さうごうをくずし、一匹ずつ、つぎつぎに舌で子猫の体じゅうをなめてやっていた。ピーターはその猫に触ってもいいと言われた。母親猫はやわらかくて暖かく、体の中に何だか奇妙な、どきどき脈打つような音をさせた。あとで知ったのだが、それは猫がのどをごろごろ鳴らす音で、悦にいつて満足していることを示すのだそうである。

そのとき以来ピーターはどうしても自分の猫をほしいと思った。

しかし猫を飼うことは許されなかった。

ピーターの一家はキャベンディッシュ広場近くの、昔からうまや町と呼ばれている界限の小さな家に住んでいる。

ときどき休暇で帰って来るピーターの父親ブラウン大佐は、ピーターが猫を飼うことをべつに気にもしていなかったが、母親のほうは、猫を飼っていなくてさえ、狭い家の中には、通りからの砂埃もふんだんにはいるし、動きまわるほどの場所もないするし、それにスコットランド生れのばあやは、猫が嫌いでこわがっているのだから、いけないというのである。ピーターの母にとっては、ばあやにいつまでも家に居ついて、ピーターの世話をしてもらえるようにするためには、猫のことではばあやの機嫌をとることが重大問題だったわけである。

ピーターはそういうことはすべて知って、理解もして、世の中とはそういうものなんだから、というわけでは我慢していた。しかしそれだからといって、ピーターがつらい、耐えがたい思いをするのはどうすることもできなかった。なぜなら若くて美しい母親は、ピーターにさいてくれるひまなど全然なさそうだったからである。つまり、ピーターが自分の猫をほしとあこがれる気持を、忘れさせてくれるひまなど、全然なさそうだったからである。

ピーターは広場の猫のほとんどみんなと友達だった。うまや町に近いキャベンディッシュ広場の小公園の管理人の飼う猫で、胸もとに白い斑点があり、シリリング銀貨ほど丸くて大きい、緑色の目をした大柄な黒猫も、一日のうちの

大半五番地の窓に、またたきもせずうずくまっている二匹の灰色猫も、十一番地の地下室に住んでいる管理人ポビットおかみさんの飼う猫で、緑色の目をしたショウガ色の猫も、その隣りの家のたれ耳をしたみけ猫も、さては一日の大半二十七番地の窓のクッションの上に寝てはいるが、晴れた暖かい日には、戸外運動に広場に連れて来られるブア・ド・ローズ種のペルシャ猫も——みんなピーターの友達である。

それにもちろん、路地や、うまや町裏の空襲で焼け出された廃屋に住んでいるのら猫もいるし、公園の柵から忍び込んで来る無数の宿なし猫もいる。とら猫、ぶち猫、白黒猫、レモン色猫、黄褐色猫、まだら猫などが、ごみ箱や、くず紙束や、台所の残物入れの陰に出たりはいったりしているし、けんか猫、吠え猫、こそこそ猫、ごみさい猫、宿なしののら猫、おいぼれ猫、子猫などが、気をいらだたせながら、苛酷で無情な都会から、何かしら餌にありつこうという、むずかしい仕事にうきみをやつしている。

ピーターがいつも家までさうやって来るのはそういう猫たちである。ときにはこわきにかかえられながら、蹴ったり爪を立てたりするものもあるが、中には暖かいところへ連れて行かれて、食事にありつき、やさしい人間の手で撫でてもらえるかもしれないと、つかまえられたの喜んで、ぐったり身をまかす猫もいる。

たまにはピーターがばあやの目をかすめて、うまうまと

一匹を子供部屋の戸棚にこっそり持ち込み、みつかるまで
まる二日間も飼っていたこともある。

ばあやはみつけると、かねて屋敷の中で猫をみつけた場合どうすべきか、ブラウン夫人から教わったとおり、通りに面しているドアを開けて——「シッ！ 出てうしろ、うすぎたないのら猫めが！」と叫ぶか、それともほうきを持って来て追ひ払うかするのである。もしそれでもききめがなく、隠れていた猫が隅っこにすくんでいるだけだったら、ばあやはその猫の首ったまをつかまえ、手をぐっと突き出したまま、通りにほうり捨てるのである。そのあとでばあやはピーターに痛い思いをさせるわけである。もっともピーターにとっては、せっかくの新しい友達を失ったつらさと、自分が大事にしてやっていたとき、その猫がどんなに喜んでいたらか、ということを思い返して心を痛める苦しさにくらべたら、そんなせっかんくらいは大したことはなかったのだが。

ピーターはそうしたことが起った場合、もはや泣き声をたてないでいるようになっていた。人間は声をたてないで心の中で泣くことができるものだということを、ピーターはいつの間にか発見していた。

ピーターは今病気のだから、泣いてみたいような気がした。ただこんどは声をたてて泣いてみたいような気がしているのに、ひとつも声をたてることができないとわかって、何だか妙な気がした。一体どういうわけなのかさっぱり

りわからない。わかっていることはただ、郵便屋さんとおしゃべりしていたばあやのそばから、ぼくが急に飛び出し、とら毛の子猫のそばへ行こうと思って、道路を渡ろうとしたとき、ぼくの身にどういうことが起ったのかわからないが、とにかくその何かが起ってからというもの、どうもものごとがみんな妙なふうになっていくということだけである。

事実ピーターにぶつかったのは、広場の角を曲ってフルスピードで走って来た、石炭トラックだったのである。ピーターが何も知らずに歩道のふち石から飛び出し、そのトラックの前を走っていたとき、はねとばされたのである。それからあとのことは、大勢の叫び声も、事故で集まった人たちのことも、ばあやが大声でわめきながら泣き叫んだことも、ピーターを抱き上げて家まで運んでくれたお巡りさんのことも、誰かが医者呼びに行き、お母さんの行先を捜しまわったことも、その後で病院に送り込まれたことも——ピーターは長い、実に長いあいだ、知らないで過したのである。だからそのあいだに、いろいろ変わったたくさんのことが、まずピーターの身の上になることになったわけである。

というのは、一つには夜があまりにも急速に昼に変わるで、まるでスクリーンがすっかり真っ暗になったり明るくなったりする、映画でも見ているような気がするし、また一つには、ばあやの顔がまずぼくの上に現われたかと思う

と、やがて遠くのほうにすっと消えていき、こんどは、まるで近づいて来る自動車のヘッドライトのように光るレンズの眼鏡をかけて、戻って来るといった具合に、明らかに出来事がすべて妙な変り方をするように思われるからである。

ところで、いよいよ何かまったく奇妙なことが起ろうとしていることがピーターにわかった。さきほどばあやの姿が遠くのほうに消えていったあとで、ピーターのベッドが波に揺れる小舟のように揺れたからである。やがてばあやの姿が再び引き返して来たとき、それはもはやばあやの顔ではなく、公園の柵のそばで身づくろいしていて、ぼくがつかまえて抱きしめてやりたいと思った、とら毛の子猫の顔に変わっていた。

事実、今ぼくの枕もとにこしかけて、いかにも懐かしそうに笑いかけているのは、そのかわい子猫だったのであるが、その体は今や途方もない大きさの猫となり、その目はスプ皿のように大きくなってびかびか光り、まるでばあやの眼鏡そっくりである。ぼくの姿の映っているのが見えるところまでそっくりである。

ところが途方に暮れたのは、そこに映っているのはぼく自身だということはおわかってはいるのだが、どうしてもそれがぼくらしくは、とうてい思えないことである。というのは、通りすがりに、廊下の長方形の長い姿見に映る自分の姿はよく見慣れていたし、またときどきはばあやの眼鏡

にだって、ぼくの短く刈り込んだトビ色のカールしている髪の毛や、丸っこい目や、上向きの小さな鼻や、がんこそうなあごや、二つの野生リンゴのような赤味のさした丸っこいほおなどが映るのを見たことがあるからである。

はじめのうちピーターは自分がどんなものに見えているのか、はっきり見きわめてみようという努力はしなかった。なぜならピーターは、その子猫の冷たい緑色のブルーのような目の中にわれを忘れてるだけで、楽しくて心がなごんでくるからである。とても静かで、深くて、澄みきっているの、まるでエメラルド色の湖水で泳いでいる思いがする。その子猫の暖かい微笑につつまれて、その湖水の美しい色の水の中につかっていることは、実に楽しいことである。

ところが間もなくピーターはそれが自分に与える影響に気づきはじめた。

ときどきその画像はほんやりしてくるのであるが、やがてしばしのあいだだったが、その画像がきわめてはっきりしてきたので、ピーターは自分の頭の格好がどんなに変ってしまったかということを見きわめることができた。格好だけではなく、色まで変ってしまったのである。これまで見慣れていたのはトビ色のカールした髪の毛と、リンゴのようなほおだったのに、自分の毛皮はこんどはとても短く、まっすぐで、純白になってしまったように思われたからである。

「おや、なぜぼくは毛と言わないで『毛皮』と言ってしまったのだろう」とピーターは自分につぶやいた。「何というおかしいことを言ってしまったのだろう。ぼくが猫に変わっていくのは、この猫の目をじっと見ていたからにちがいない。もし本当にそういうことが起っているのだとしたら」

しかしピーターはその目を見つづけていた。今のところピーターには、ほかに視線を向けるところがないことがわかっていたからである。そしてその画像がぼやけてくると、ピーターの姿は、まるで内部で何かが起っているように震えているのである。そしてその姿がはっきりしてくるたびごとに、ピーターはさまざまな新しい、こまかい変化に気づくのであった。たとえば奇妙につり上がった目は、今はもう灰色ではなく、水色になってしまっていることや、鼻が上向きの小さなかわいらしいものから、いつの間にかローズ、ピンク色の三角形のものに変わり、それが口もとまでつづいているので、もはや自分のものに似ているどころか、ピーターの考えうるどんなものにも、似ても似つかないものになってしまったことなどである。その鼻はこんどは下向きにカーブして、長い、鋭い、そして白い歯の上までつづき、両側には一組ずつのとても大きな、逆立った白いひげが突き出ている。

顔は角ばり、つり上がった目は大きくじっとものを見つめ、鋭く上がった耳は屋根裏部屋の窓のようにびんとはね

ている。「そうだ、もしぼくが猫だったら、きっとこんなふうな顔になるだろうと思う」とピーターは考えた。やがてピーターは目を閉じた。なぜならこんな奇妙な、こんな風変りな自分の姿は、今ではもう実にはつきり、まごうかたなく自分の姿だったので、そう思うといきさか恐ろしくなってきたからである。猫になりたいと思うことと、猫そっくりの格好になることとは、話がまったく違うようである。

ピーターが目を開けたとき、一瞬相手の猫の目の、鏡の魔力が破れてしまったように思われた。というのはピーターはその目をのぞきこむのをやめて、その代り、どうにかして自分の手足を見おろすことができたからである。ピーターの手足は純白で、大きく、毛皮をかぶり、裏側には奇妙な、やわらかい、ピンク色がかった足の裏がついていて、爪はトルコ剣のように彎曲し、先は針のように鋭くなっている。

驚いたことにピーターは、自分がもはやベッドの中に寝てはいないで、ベッドの上にあがっていることがわかった。ピーターの体全体はそのときにはもう、細長くすらりとなっていて、ピーターの母親が冬のあいだおしゃれして外出するとき、いつも両手をさし込んでいく白テンのマフそっくりに、いかにもやわらかそうで真っ白である。そして体のはしには、彎曲してうねったり、びくびく動いたり、激しく打ちつけたりする、目のない白蛇のように見える尾

がついていないか。耳の先から尾の先まで、ピーターは一点のしみもない純白の毛皮におおわれている。

その微笑と、じっと見つめる目で、明らかにピーターをこんなめっちゃなめにあわせてしまったとら毛の子猫の姿は、いつの間にか消え失せてしまい、もはやどこにも見られなかった。代りにそこにいたのはばあや一人だけであつたが、これまで現われたときの十倍も大きな姿になつたばあやは、枕もとに立ちはだかり、ピーターの耳が痛くなるほどの大声で叫んだ――

「ほんとにいけない坊ちゃんたら、ありゃしない！　またぞろ通りからのら猫を引きずり込むなんて！　こら！　シッ！　出て行け！」

ピーターも大声で叫んだ――「でも、ばあや！　ぼくピーターだよ。猫じゃないよ。ばあや、いけないよ、お願い！」

「文句があるのかい？」とばあやはわめいた。「そんならほうきだ」ばあやは廊下に出て行き、ほうきを持って戻つて来た。「さあ、これだ。出て失せろ！」

ピーターはゾッと寒けがした。ばあやがほうきを振り回しているあいだ、ピーターはベッドの隅っこに寄つてちぢみあがりながら、「ばあや、ばあや、違うんだ、違うんだ！　ねえ、ばあやったら！」と叫ぶよりほかしがたがなかった。「こっちこそニャオ、ニャオと鳴いてやりたいわ」とばあやはどなつて、ほうきを下に置き、ピーターの首ったまを

つまみあげたので、ピーターは情けない叫び声をたてながら、ばあやの手から吊り上げられたまま、必死に手足をばたつかせていた。

ばあやはピーターをつかんだ手を、できるだけ体から離れたまま廊下に飛び出し、階段を駆け降りながらつぶやいた、「ピーター坊ちゃんをみつけたら、晩飯ぬきでベッドに追いやってやるから、いいわ。ほんとに、今後はもう絶対に猫など持ち込んではいけなないと、何べん坊ちゃんに言いかけたかしれないのに！」そしてばあやはうまや町の通りに面した一階の玄関に出た。

そしてピーターを通りにほうり捨て、ドアをびしゃりと閉めた。

2 キヤベンディッシュユ広場 からの逃走

外のうまや町は情けないほど寒くて雨降りである。さきほど陽が落ちたとき、急に寒さが襲ってくるとともに、いつの間にか雲が集まり、雨が降りだし、それが激しい大降りとなつていた。

外に閉め出されたピーターが、いかにも痛ましそうな、おびえた鳴き声をたてたので、向い側に住んでいる女の人が主人に言った、「おや、あれが聞えます？　小さな子供

の泣き声そっくりに聞えるんだけれど！」

主人がカーテンを開けてのぞくと、ピーターは大声で叫んだ、いや、自分では大声で叫んだつもりだった——「ああ、ぼくを入れてください！ お願いだから入れてください！ ばあやがぼくをほうり出したんです。ぼくを、このぼくをほうり出したんです！」

やがてピーターの耳に、その主人がカーテンをおろしながら言ったことが聞えた。「またのら猫さ、大きな白い雄猫だよ。一体あいつらはみんな、どこからやって来るんだろうなあ？ こうギャーギャー鳴きたてられたら、いっときもゆっくりやすめないじゃないか。こら！ シッ！ シッ！ あっちへ行け！」

夕刊配達の少年が自転車を通りかかり、ドアの外の猫を追ひ払っている声を聞きつけ、ひょっとしたらチップにありつけるかもしれないと皮算用して、手伝ってやることに肚を決めた。

その少年は自転車のまま、ともにピーターの鼻先まで乗りつけ、「おい！ こらッ！ シッ！ あっちへ行け！」とどなりながら、やがてサドルから身をかがめ、たんだ新聞でピーターの背中を叩きつけた。ピーターはその襲撃からめくらめっぽうに逃げ出した。すると間もなく、何だか途方もないほど大きなもので、見たところ家ほどの大きさのものが、車輪に乗ってがらがらすごい唸りをたてながら、そばを通り過ぎたとたんに、波立つ泥水が巻き上が

り、それがピーターのわき腹にどしんと落ちてきた。ピーターはあわててうまや町を逃げ出し、毛を通して下の皮までびしょ濡れになりながら、キャベンディッシュ広場にしゃがみ込んだ。

ピーターは自分がこんなに乱暴に、突然投げ出された世界は、一体どういう世界なのか、まだあたりを見まわしてみただけの余裕さえなかった。

その世界はこれまで出会ったどんな世界にも似ていなかったの、ピーターは思わずぞっとした。

その世界は完全に、重い編上靴や、かちかち音をたてるハイヒールをはいて、向う見ずに歩きまわる足から成り立っているように思われた。その靴から上に突き出ている脚は、雨の降っている上の暗い夜の闇の中に消えているのだが、それらすべてが何の注意も払わず、めくらめっぽうにあちらこちらに殺到している。それとおなじように向う見ずだが、それよりさらにはかり知れないほど危険なのは、いつも一つがほかの一つのうしろにつづいて二つ、三つ、四つ、ひゅうひゅう、がらがらと、すごい唸り音をたてながら通り過ぎて行く、途方もなく大きな車輪である。そういうものの一つの下敷きになったら、家の居間に敷いてある豹の毛皮より、もっとべちゃんこになるにちがいない。と言ってもピーターにとっては、人間の足だってどうやら危険でないというわけはなかった。なにしろいま気づいたのであるが、ピーターは今では自分が、雨に濡れて光っ

ている広場の歩道に、二十五センチにも満たない高さの四つ足で、震えあがっている身の上に追いやられているのだから。靴というものには目がないので、自分がいまだこへ行こうとしているのか見ることもできないわけである。だから靴は四方八方からまるで切りつけるように、ぶつかるとような格好でやって来るうえ、どの一組の靴もおなじ歩度で歩いてくれないものである。

その靴の一つがピーターの尾を踏みつけたので、これまで感じたことのないようなずきずきする痛みが、ピーターの全身を突き抜け、思わず腹立たしいおびえた叫びが、そののどもとから飛び出した。踏みつけた足が一瞬相棒の足といっしょに、ずるずると滑るような妙な踊り方をしたかと思うと、上の暗闇からどなりつける声が落ちて来た——「こん畜生！ もう少しで首すじをちがえるところだったじゃないか！ どけ！ 誰かが怪我でもしないうちに、さっさとこんなところから消え失せろ！」

そして踏んづけないほうの足が歩道から飛び上がり、それがさっとおろされると、いやというほどピーターのあばらと背中を踏みつけ、しびれるような打撃をピーターに与えた。

おびえきったピーターはやにわに駆け出した。自分がどこへ行こうとしているのかわからなかったし、最後はどうなるのかもわからなかったけれども。

突然ロンドンじゅうがいつの間にか自分の敵になってし

まったような思いがする。前にはあれほどあいそよかったものも、おもしろかったものも、楽しかったものも、ありとあらゆるものが——たとえさまざまな物音や、匂いや、方々の商店のウィンドウの明るい光や、人々の声や、道路の交通の騒がしさや、あわただしさや——そうした一つ一つのものがみんな寄せ集まって、ピーターに襲いかかりはじめた狼狽と恐怖を、いやましにつのらせるのであった。

というのはピーターは、自分がまだもとのピーターだったところとおなじような考え方をしたり、感じ方をしていくことは知っていたのだけれど、実際はもうそんな昔のピーターではなかったからである。二本の足で立って歩きまわり、背のびしなくとも暖炉の上の棚にあるものに手がとどくほど、背の高かったピーターではなかったからである。

情けないがそうなのだ。そんなピーターはもう過去のものであり、現在のピーターは四つ足になり、耳を頭のうしろにびたりつけ、尾をびんと立てながら、自分がどこへ行くのか見もせず知りもせず、ただむちゃくちゃに雨に洗われたロンドンの街々の街路を通り抜けて突っ走っているのである。

いつの間にかピーターはもう自分の家の近所からは遠く離れ、見慣れていたようなすべてのものからは遠く離れ、いま明るい照明のある人混みの往来を駆けていたかと思うと、こんどは真っ暗な路地や曲りくねった細道を駆けていた。あらゆるものがピーターをおびえさせ、ピーターの心

を恐怖でふさいだ。

たとえば雨というような、恐ろしいしろものがある。

男の子だったころピーターは雨を愛し、外へ出て雨の中に立っているのが何よりの楽しみだった。雨がほおや髪の毛に当る肌触りが大好きだったし、空からころがり落ちて来るときの、殺到する音が大好きだったし、顔にびしやりと当り、やがて小さな雨つぶとなって、鼻の先まで伝わって来る、やわらかい感触が大好きだった。その雨つぶを、下唇を突き出して受けとめ、味わってみることもできたのである。

しかし猫になってしまったらしい現在では、雨が耐えがたいと言ってもいいくらいである。

雨はあつい毛皮の中までしみ込み、そのおかげで毛はもつれてきたなくなり、ところどころにまといついている。

そのため毛の持っている暖かさと保護する力が失われているのに、今はそのうえに、商店や家々の側面に打ちつけている冷たい風が、感じやすい皮膚に容易にしみ込むのである。だからフルスピードで駆けているにもかかわらず、ピーターは骨のずいまで冷えてくるのを感じた。

なおそのうえ、四本の足の小さな足裏がうすいため、冷たさと湿気を全部そこから集めているような気がするわけである。

ピーターは自分が今逃げ出しているのは、一体何から一番逃げ出そうとしているのか、自分でわからなかった――

雨からだろうか、打たれて怪我をすることからだろうか、それとも自分の身に起った変身の恐怖からだろうか。

ピーターは足をとめて休むこともできなかった。もう一步も足を動かすことができないと思ったほど、走り疲れたと感じたときでさえ、避難所を捜すことができなかった。というのは街じゅうにあふれているあらゆる人間が、あらゆる物が、自分の敵であるというように思われたからである。

一度ピーターは息をつこうと思って、一台の荷馬車からおろされている、落し板のようなものの下で足をとめた。そこにはいれば、少しは雨をよける足しになると思ったからである。ところがそのとき突然、まるで山腹から岩や丸石が地滑りして落ちて来るような轟音をたてて、荷馬車の開いた後部扉から、石炭が落し板を伝わって流れ落ちはじめた。あっという間にピーターは息がつまり、真っ黒い石炭の粉を一面にかぶってしまった。

石炭の粉はびしょ濡れの毛皮の中に食い込んで黒い縞目をつくり、目の中、鼻の中、さらに口や肺の中にまではいってしまった。そのうえ、そのすごい物音に、またもやピーターの心臓は狼狼の鼓動を打ちはじめた。ピーターはそれまで、騒がしい物音などこわがったことは一度もなかった。小さかったころ、ナチの電撃に見舞われたときも、爆弾や大砲の大きな物音にさえ、おびえたことはなかった。

ピーターには、音というものが現在の自分にとって、全